

祇園祭・山鉾町の人びとの心意気

— 聞き取り調査と資料調査を中心に —

小 松 秀 雄

Summary

The Spirit of Five Leaders in the Downtown Area of the Gion Festival: Interpreting Qualitative Data (Conversations and Documents)

KOMATSU Hideo

The Gion Festival (Gion Matsuri) of Kyoto in the modern society consists of the procession of portable shrines (the Sacred Carriages) of Yasaka Shrine and the grand procession of Yamaboko (the floats). In this paper, I intend to reconsider the spirit of the leaders in the downtown area that is called Yamabokocho. These leaders are five people of four areas, which are the chief director of Kankoboko, two directors of Minami Kannon-yama (Mukadeyacho), the chief director of Arare Tenjin-yama (Tenjinyamcho), and the director of Kikusui-boko.

The concept 'spirit' (the Japanese 'Kokoroiki') corresponds to 'ethos', or 'habitus' that has been making full use in sociology of Max Weber and Pierre Bourdieu. This paper is the ethnographic research of the downtown area (Yamabokocho) of The Gion Festival. I intend to analyse the conversations of the leaders and the documents of the downtown area.

はじめに

京都の祇園祭に関する資料は数え切れないくらいあり、資料の観点や内容も多種多様であるが、祇園祭の歴史と研究史、および現代の祇園祭全体の概要については、中間報告の形で「京都の祇園祭の社会学的再考」(『神戸女学院大学論集』第50巻第2号、2003年12月)というタイトルでまとめたことがあるので、本稿では、現代の山鉾町で長年活動してきた人びとを取り上げて、各町々や祇園祭の諸問題にも目配りしながら、彼らの心意気(エートス *ethos*、またはハビトゥス *habitus*)を探ってみたい。その際には、科学研究費補助金(2001年度～2004年度)による「都市のなりたち研究会」(主に京阪神地区の研究者25人前後の研究会)に所属していたときに実施した聞き取り調査と参与観察、およびその後の筆者の調査を通じて収集した資料を活用していく。なお、聞き取り調査(テープ起こしを含む)と参与観察に際しては、2001(平成13)年度から2004(平成16)年度まで在学したゼミの学生に様々な形で協力してもらった。

本論に入る前に、上記の日本語の心意気という言葉について簡単に説明しておきたい。心意気という言葉は一般に多種多様な文脈で使用されているが、括弧内に示した、社会学の基本概念であるエートスとハビトゥスに対応する日本語として使用する。このエートスとハビトゥスという用語はマックス・ウェーバーとピエール・ブルデューの社会学で駆使されている戦略的概念であり、宗教文化的要素と生活技能的要素が融合した人格的形成体を意味する言葉である。実践的起動力となる倫理的生活態度、ないしは慣習行動と表象の生成原理と訳されることも多い。心意気という言葉からは、意欲、想い、情熱、使命感、倫理意識などのメンタルな要素を想像しがちであるが、本稿では、身体技法、芸能やものづくりの技能、組織の運営方法(ノウハウ)、コミュニケーション能力などの要素を含む全体的な心身能力を念頭に置いて論述していく。現代社会学のエスノメソドロジーが会話分析の研究方法を用いて解剖しようとしているエスノメソド(ethnomethod 人びとの日常生活の方法(論))、あるいは柳田国男等の民俗学(フォークロア)が着目している常民の民間伝承という観点も心意気のなかに組み込んでいきたい。

1. 京都の祇園祭・山鉾町の概観

現在の山鉾町は、四条烏丸から四条堀川を中心に四条通の南北の両側に広がる、32の山鉾、つまり32の町から成る地域であるが、最初に、本稿に関連する山鉾町の歴史地理的概要と現代の諸問題を簡単に整理してみたい(図1～3を参照のこと)。

八坂神社(祇園社)は元は神仏混淆の寺社であり、起源も創始の経緯も定かでないことと同様に、祇園祭(祇園会)の始まりにも、いろいろな説があり、今のところ第一回目の祇園祭の年を確定することは難しいけれども、9世紀中頃と考えておこう。最初の頃は神輿渡御がメインイベントであり、少なくとも現代風の山鉾の巡行という定期的イベントが実施されるように

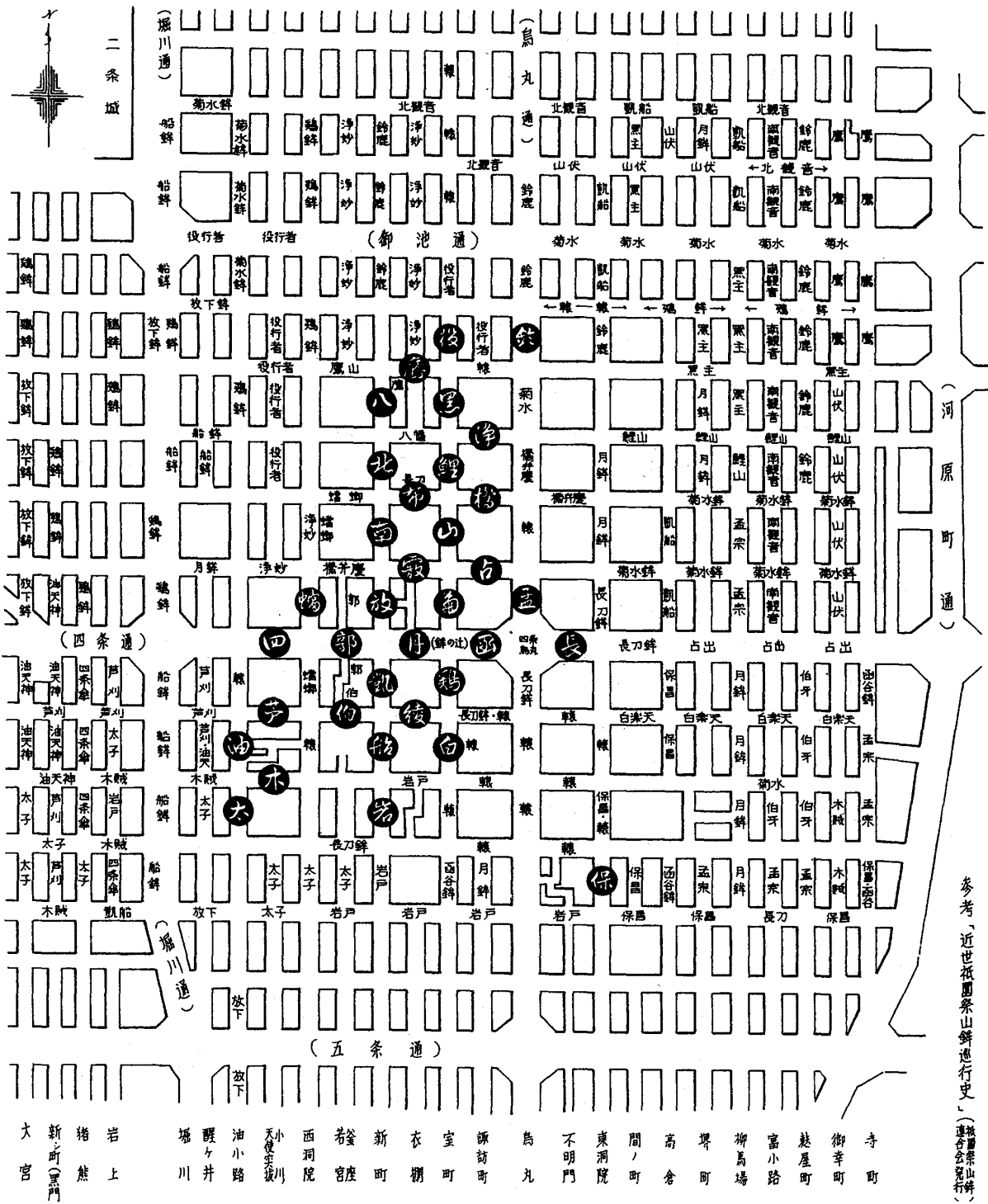


図2 近世の山鉾町と寄町・轅町(松田元『祇園祭細見(山鉾篇)』所引)

(注) 白抜き文字のある黒丸(35個)が近世の山鉾と町である。現在、巡行しない、いわゆる休山鉾は、上から鷹山(鷹)、布袋山(布)、凱旋船鉾(凱)の3つである。

祇園社記第十五、応仁乱前分山鉾58基のうち、位置の不明なものが八基ある。これは記入できない。
 甲ほく（所々のくら役）、ふすま僧山（鷹つかさ猪熊兵衛と間）、西行山、しねんこし山、てんこ山、柴かり山、小原木の山、かさほく（大との房）
 ()で示したのは「ほくの次第（祇園会山鉾事応仁一覽（乱）之後再興）」として記された17基。
 []で示したのは明応九年の「祇園会山鉾次第以圖定之間」として記された36基である。ただし「船鉾」は名が記されていないので「廿七番」と記した。

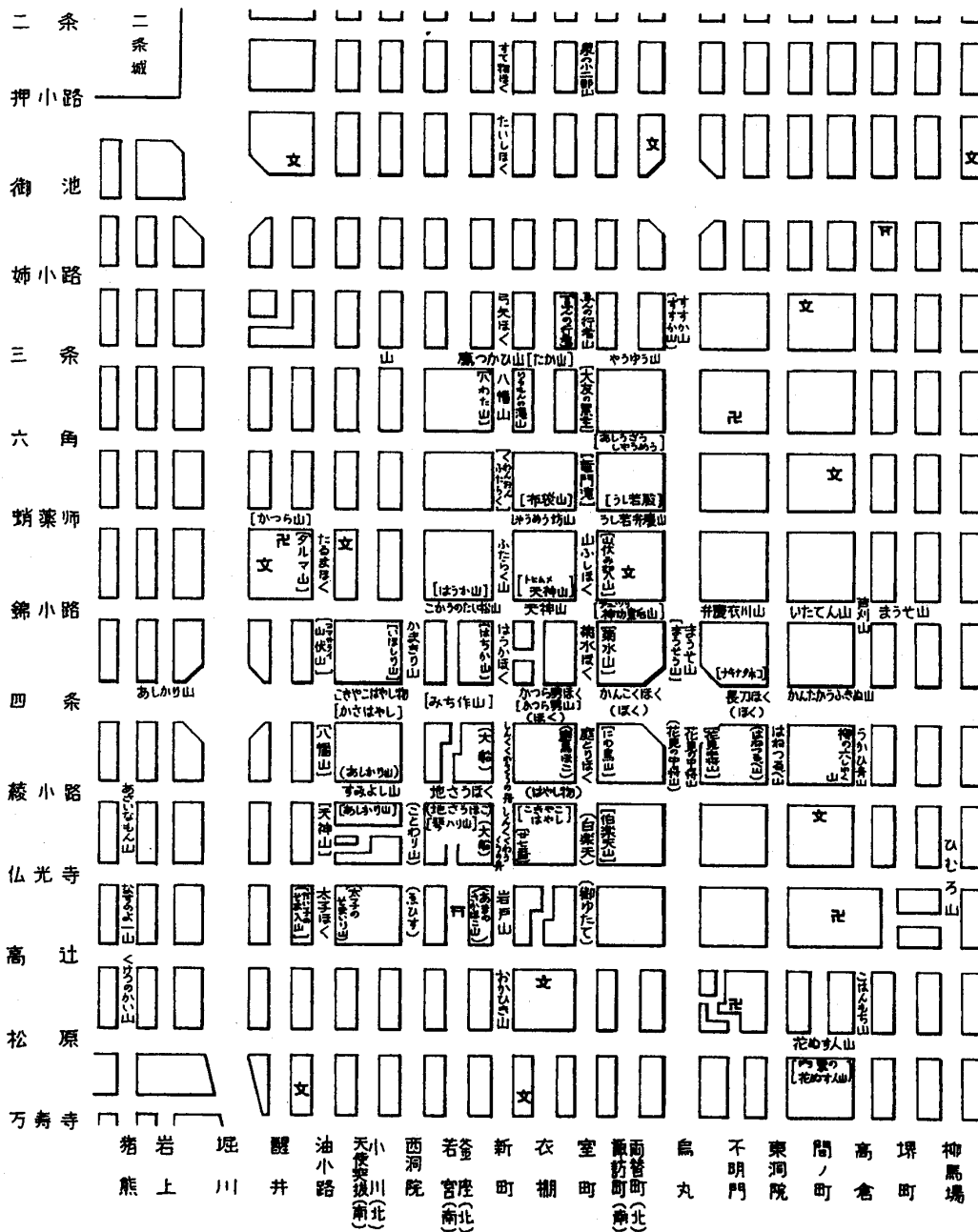


図3 記録に残る山鉾（松田元『祇園祭細見（山鉾篇）』所引）

(注) 60前後の山鉾が列挙されているが、初期（南北朝時代）の山鉾は現在のように華麗で大きな山鉾ではなく、簡素で小さな山鉾が多いという（脇田『中世京都と祇園祭』）。

なるのは、かなり後になってからのことである。松田元『祇園祭細見（山鉾篇）』（京を語る会、昭和52年）と脇田晴子『中世京都と祇園祭』（中央公論新社、1999年）によれば、祇園会（祇園祭）の表舞台で今風の山鉾が作られ巡行するようになるのは、南北朝時代（14世紀）であり、最盛期の応仁の乱直前（15世紀中頃）には約60前後の山鉾があったという。祇園社の神人になった堀川材木座と綿本座の商人たちを中心とする町衆が、都（ミヤコ）における自らの町共同体の防衛と結束の力を象徴する出し物として山鉾を競って創り上げ、しだいに華麗な装いを施すようになっていった。少なくとも現在の山鉾町地域よりもひと回り広い範囲に60前後の山鉾が存在していた（図3と脇田前掲書、195～198頁）。ところが、応仁の乱（1467～1477年）で都（ミヤコ）の建物と町共同体そのものが壊滅的打撃を被ると同時に、かなりの山鉾が焼失したり損傷し半減してしまう。その結果、古代・中世的な社会のしくみと建築物が崩壊し、新しい近世社会と建築物への道が切り開かれていく。

豊臣秀吉と徳川政権の時代に整備された近世都市・京都の都心に位置する山鉾町の町内社会は、通りをはさむ両側の25戸、人口150人前後から構成され、表通の家持ち層と路地の借家人層に区別されていた。家持ち層を中心に両側町の町内と祭りの運営がなされていたが、とりわけ祇園祭に関しては寄町（よりちょう）・轅町（ながえまち）制度によって不足する人的資源・資金・物を調達する方式で運営されていた。応仁の乱のときと同じく、幕末・明治維新の変動期に戦火のため多くの山鉾が被害を受けて、姿を消したり長期間再興できないようになってしまった。また、山鉾町を支えていた寄町・轅町制度が廃止されて危機的な状態に陥ったけれども、時代の変化に対応して清々講社や山鉾連合会などの各種の支援・協賛組織とネットワークが形成され、それらを支えにして祇園祭は伝承されてきた。近世に形づくられた両側町の形態、社会的構成、世帯数と人口の規模は、第二次大戦後まではそう大きくは変化しなかったといってもよいだろう。形態学的地理学的側面が維持された反面、土農工商の身分制の廃止と移動の自由化、および工業化と商業化の進行の過程で山鉾町においても、社会移動により短期間で住民が入れ替わるケースが増えていった。

近世・近代の山鉾町の形態学的地理学的側面が大きく様変わりするのは、戦後の高度経済成長期（1950年代後半～70年代中頃）である。この時代に都心の近代化の過程でビル化と商業・サービス産業化が進み、一戸建ての伝統的町家は少しずつ姿を消していった。それに伴い、町内の地域社会の担い手となる住民の数も減少して、祇園祭の運営にも難しい問題が現れてきた。個々の代表的な事例に関しては後述するが、運営の中核となる人材、祭りのクライマックスともいべき山鉾の巡行に必要な曳き手や囃子方（祇園囃子の演技者）などの人材を町内で確保することが難しくなった。人、物、お金の調達をめぐる問題は、古くから全国のどの祭りにも多かれ少なかれつきまとっていたけれども、資金面については山鉾連合会に加えて個々の山鉾の財団法人である保存会を設立して対応した。経済的に豊かになった日本の近代社会における山鉾町では、資金や物よりも人的資源の問題が焦点になり、町内社会を取り巻くサポート・ネットワークの形成、それを通じてアルバイトやボランティアの形態で人材を調達する方式で対応してきた。もちろん、近代的対応方式は現代にも受け継がれ、個々の町と山鉾の事情

に適合するように工夫された方式で現在の山鉾町と祇園祭を支えている。

高度経済成長期後の1980年代以降は新たな現代的問題が生じてきている。「住環境を守る・京のまちづくり連絡会代表」の木村万平氏は、「一刻も放置できない京都都心部崩壊」(『住宅会議』第52号、2001年6月)において、山鉾町を含む「田の字型地域」(御池通～五条通、堀川通～河原町通、約1.5キロ四方)の憂慮すべき事態を論述している。1980年代のバブル期には地価の高騰を背景にした不動産投機が山鉾町でも見られ、和装産業の不況と重なって土地利用の形態は、例えば倒産した卸問屋の跡地にマンションを建設する方向へと変わり始めた。3章の百足屋町(南観音山)のまちづくり運動でも関連する問題を取り上げるが、80年代から木村氏は、「不健全な投機と土地利用による都心の地域社会の崩壊」に関する警鐘を鳴らしていた。バブル崩壊後も室町の和装産業の不況は回復せず、90年代の建築基準法等の規制緩和や都心回帰現象と歩調を合わせるかのように、90年代末からは「田の字型地域」では大きな高層マンションの建設が目立つようになる。山鉾町地域でも、10階建～15階建、50戸～80戸規模のマンションが建設され、世帯数と人口が急増する町が増えてくる。マンションには、取り壊された町家に住んでいた現住民、都心回帰した元の住民も入居するケースもあるから、まったくの「よそ者」や外来の新住民だけがマンション住民とはかぎらないし、あるいはまた、マンション住民だから山鉾町や祇園祭の担い手の資質がないというわけではない。町家の住民とマンション住民との連携も可能であるし、経験を積んでいけばマンション住民も町や祭りの担い手になることもできるだろう。木村氏は、地域コミュニティを崩壊させてしまう巨大な高層マンションという建築物そのものに危機感を抱いている。

「30年も経てば、マンションの配管は完全に老朽化する。それだけではなく、建物そのものの老朽化も招く。老朽化に伴って空室は増え、それがスラム化につながる。……京都都心部の高層マンションは、高さや容積率が制限いっぱい建てられたものも多いので、建て替えにあたって、高さ・容積率を増やすことは困難と見てよい。空室の増えた分譲マンションは、デベロッパーが買い取らぬ限り、幽霊ビル化する。マンションの墓場を鉾が行く—21世紀の半ばを迎える前に、そういう地獄絵さえ想定される。老朽化し、幽霊ビル化した無人のマンションの後始末はだれがするのだろうか。市民の税金を使って市が取り壊すというのだろうか。」(「一刻も放置できない京都都心部崩壊」19頁)

山鉾町は五十年後、引用した論文の予測通りのゴーストタウンになるのだろうか。今こそ行政と住民の見識、情熱、対応力が問われるだろう。木村氏は、利潤追求のために土地利用しようとする大企業の行動を行政と住民が協力して規制しつつ、住民主体の生活空間の保全と再生のために努力すべきであるという。

さて、次の2章から登場する人びとは、それぞれの町が置かれた立場から自分なりに山鉾町と祇園祭を継承し、より良い形で未来に伝えようと奮闘している。冒頭で述べたように、彼らの心意気(エートス、ハビトゥス)を描いていくつもりである。山鉾の保存会や町内会(自治

会)のいろいろな役職を長年務める過程で培われた組織運営のノウハウやコミュニケーション能力、囃子方の鉦・太鼓・笛のお稽古を通して体得された芸能の技能、および、それらの身体能力や技能に融合されている熱い想いや使命感や倫理意識が心意気として描き出されるだろう。ウェーバーがエートスという概念で示そうとした倫理的実践的起動力、ならびに、身体論的構造論的観点をベースにしてウェーバー社会学を批判的に継承したブルデューがハビトゥスの概念で解明しようとした実践感覚と慣習行動=表象の生成のしくみが、心意気には含まれている。冒頭の説明のくり返しになるが、それは、エスノメソドロジーが会話分析の手法に基づき解剖しようと試みているエスノメソド(人びとの日常生活の方法)であり、柳田国男等の民俗学が取り出そうと試みた常民の民間伝承でもある。

2. 住民のいない鉦町と新しい祇園祭の試み

前の1章で概観したように、千年の都であった京都の町の姿と社会構造も、長期間続く大規模な内乱や対外戦争を時代の節目として変化した。近世以降では、とりわけ明治維新と第二次世界大戦という二つの大きな歴史的出来事を転機として様変わりする。近代化の過程で古い町家がなくなりビル化していき、町に居住し生活する住民の数が減り、仕事のために昼間だけ通勤する者が増えてきた。そのような歴史の流れを象徴する町が函谷鉦(かんこぼこ)町であり、応仁の乱以前に町と鉦の名前が記録に表れている(前掲の松田『祇園祭細見(山鉦篇)』と脇田『中世京都と祇園祭』を参照のこと)。応仁の乱から約五百年後の1980(昭和55)年10月に町内居住の住民がゼロになり、21世紀の現在(2006年)に至るまで町内居住の人口はゼロのままである。四条通と烏丸通が交差する都心の西の一角を占める四条通の両側町であり、地下には阪急電車と市営地下鉄の烏丸駅があり、地上には銀行のビルが建ち並んでいる。

『函谷鉦町百年史』(2001年)には明治、大正、昭和の町の変遷がいろいろな図表を使って記述されているが、1868(明治元)年の町勢は家数32軒、人口123人、そして1941(昭和16)年の町勢は37軒(世帯31、無世帯6)、人口238人となっている。第二次大戦前後までは銀行のビルもあったとはいえ、いわゆる人家(町家)が大半を占めており、居住者も100人を越えていたから、町の住民が函谷鉦の諸役割を担い祇園祭を実施していた。戦後の日本の高度経済成長とともに函谷鉦町の近代化=ビル化も急速に進み、1966(昭和41)年の町の概略図では両側町の四条通南側全域が銀行などの企業のビルになってしまい人家はなくなっている。辛うじて北側の函谷町町会所周辺に4世帯ほどの世帯主の氏名が入った建物が残っている。昭和40年代に町会所が函谷鉦ビル(昭和49年完成)に建て替えられる過程で、事実上この町からは世帯=居住者はいなくなる。

この町のビルに会計事務所を持つN.Oさんは函谷鉦ビル建設の時代まで世帯を構えていた一人であり、今年(2006年)85才で亡くなるまで長年函谷鉦の「町内会」と(財団法人)保存会(1966(昭和41)年設立)を支えてきた中心人物である。残念ながら、生前、直接インタビューすることはできなかったが、函谷鉦保存会の理事と囃子方のリーダーの聞き取り調査、新聞や各種の関係資料等からN.Oさんの心意気(エートス・ハビトゥス)を探ってみよう。

【資料1】

「'87祇園祭 町衆たちのコンチキチン 生存策 函谷鉾保存会 N.O 理事長……（昭和）五十四年からは、町内にある十三の企業を、それぞれ住宅一軒と考へ、毎年二社から祭りの当番を出してもらうことにした。五十七年には、全国の祇園祭、あるいは函谷鉾ファンを対象に後援会をつくった。一口一万円で、現在、会員は約三百人いる。「祇園祭も時代とともに変わって当たり前。どう変わっても、私たちは立派な「昭和の函谷鉾」を築き、次の世代に引き継ぎたい。」N.Oさんは悲観も楽観もしていない。」（京都新聞、1987（昭和62）年7月15日）

【資料2】

「京の祇園祭で千百年続いた女人禁制を解き、女性の囃子方参加を認めた函谷鉾町が、新たに「平成の女（をみな）鉾（仮称）」を新調、早ければ来年の祇園祭・花笠巡行（七月二十四日）に参加させることを決めた。囃子方、曳き手ともに女性を公募する史上初の〈女人鉾〉で、鉾は今秋にも完成する。当面、メーンの山鉾巡行には参加できないが、函谷鉾の“解禁”は、一層の女性進出の呼び水になりそうだ。……N.O 同鉾保存会理事長は「女鉾の活躍が広く認められ、町衆の理解も得られれば、将来は本番の巡行に参加する道が開けるのではないか」と意気込んでいる。……」（読売新聞、1996（平成8）年7月16日）

【資料3】

「……何はともあれ、先住諸賢の函谷鉾に対する想像を絶する思い入れを知るにつけ、祇園祭に対してわれわれはより以上の懸命の努力を重ねなければならぬと覚悟する次第である。なおこの百年史のみならずそれ以前の何百年にも遡って先達の業績を調査してその史実を伝達することが、われわれに課せられた責務であり、現在も編集委員及びこれに続く継承委員諸君が古文書等資料に鋭意取り組んでいるのである。われわれとしてはこれらの諸誌が、今後祇園祭や当町を継承する人々に未来を構築するために過去を知る一端となれば、これに過ぎる喜びはない。平成十三年六月 財団法人函谷鉾保存会 理事長 N.O」（『函谷鉾町百年史』の「函谷鉾町百年史の刊行にあたって」）

【資料4】

「N.Oさんは（町内会や保存会の役員の内職）50年ぐらい。みんなびっくりするが私（囃子方のリーダーの話者）でも50年ぐらいしている。ここにきたら年の感覚を忘れる。80代の方がお元気で、普通、80といたらヨボツとしていられる方が多いが、この80はみんなしゃんとしている。……バイタリティーがものすごくある。お祭りに携わっている、神様のお手伝いをしていると自分に言い聞かせている。普通のサラリーマンが定年になって、山登りしてという人の元気さよりはあると思う。……（住民がゼロだから）自治会というのではない。N.Oさんのところの学区にある学校から、今月はこういう催し物がありますという回覧板は回ってくる。でも回すところがない。町内に住んでいるのはテナントさんばかり。回覧板をN.Oさんが見て、昔からおられる常連さんに一応順番に読んどいてと、このあたりは今こんなことしているのだなど知ってもらおう。……一応町会長は誰かと言われたらN.Oさんになる。（町内会や自治会の役員の内職）何もかも名前は一応N.Oさんになっている。」（2001（平成13）年12月22日、函谷鉾

ビル町会所での囃子方リーダーとの聞き取り調査より)

資料1全体には、昭和30年代から「ビル化と住民流出による住民ゼロの函谷鉾町」を見越して函谷鉾の生存策を構想していた姿が描かれている。世帯＝居住者がいなければ、その代わりに企業と社員に町と祭りの維持をお願いすればよいという、ドライで合理的な方針で矢継ぎ早に生存策を実践していく力強さと柔軟な適応力が感じられる。祇園囃子を子守歌として成長すると同時に、古都の都心における近代化の荒波に揉まれ公認会計士になったN.Oさんには、一方には函谷鉾と祇園囃子を守り次代へ継いでいきたいという、身体に刻み込まれた本能的な意志、他方には教育と仕事を通じて養成された、いささか打算的ともいえる計算・経営能力が兼ね備わっていたようである。それは、独自のハビトゥス（実践感覚と慣習行動＝表象の生成原理）と見なしてもよいだろう。資料2に出てくる「平成の女鉾の新調」のテーマは、1991（平成3）年に新聞報道された「函谷鉾囃子方女子部の開設」から展開されたものであり、時代に合わせて祇園祭も変わって当たり前というN.Oさんの原則（ハビトゥス）を実践したものである。それに対しては、千百年の歴史の重みと伝統を持つ祇園祭を支える人びとからは、当然のことながら反論や批判が出てきたけれども、その後の函谷鉾とN.Oさんの歩みを見るとひるまず、ぶれず進んでいる。

資料4全体からは、身近で長年にわたりN.Oさんを支え続けてきたリーダーの口から語られたN.Oさんの人となりがかいま見える。紙幅の都合上、引用したインタビューの語り全文も、また他の役員の語りも掲載できないが、とにかくバイタリティーあふれると同時に、何でもひとり先頭に立って突き進む、ワンマンで強引にも映る姿が思い浮かぶ。そのような悪い印象を与えかねない姿勢の他方には、資料3で語られているN.Oさんの真摯な態度がある。少し大げさに言えば、マックス・ウェーバーが『職業としての政治』等の作品で描いている、情熱・強い意志、洞察力・見識、責任感・責任能力（これらを合わせて世俗内禁欲的エートス）を備えた良き政治的指導者の像とN.Oさんの姿が重なり合うように感じられる。くり返しになるが、残念ながら2006年に故人となられたため、本当の人となりを感じ取り確かめることができなくなってしまった。

3. 山（＝鉾）町と担い手を守る運動と路地の住民たちの心意気

町家と町内居住者の維持という点から見て、函谷鉾町と好対照をなす山鉾町が、南観音山を支える百足屋（むかでや）町である。近代化というか、1980年代以降の現代化の過程で山鉾町では企業の古い建物が新しい大きなビルに建て替えられただけでなく、倒産した企業の跡地などに大きなマンションが建設されるようになっていく。百足屋町でも、バブル全盛期の1987（昭和62）年になって大手の建設会社が土地を買い取り、高さ30m規模のマンションを建設しようとする動きが表面化した。そのような現代化の流れに対抗して、百足屋町の住民たちは1987年12月に「山鉾町の町並と担い手を守る会」を結成し、翌88年9月に歴史的景観の保持と景観・環境を破壊する高層建築の排除を主眼とする「まちづくり宣言」を採択した。住民たちの熱意

と努力の結果、建設会社はマンション建設をあきらめ撤退したが、バブル崩壊後の1997（平成9）年頃から山鉾町を含む都心の「田の字地域」では、マンション建設の動きが再度活発化してきた。そのため、百足屋町の「守る会」では2001（平成13）年に建築協定（下記の資料5）を結び、町並を守るためのルールを明文化した。

【資料5】

「第1条 この協定は……山鉾町としての居住環境を保全しつつ、商業地としての環境を高度に維持促進することを目的とする。……第6条 協定地区内においては、次の各号に掲げる建築物は建築してはならない。（1）マージャン屋、ぱちんこ屋、ゲームセンターその他これらに類するもの……（4）共同住宅（この場合はいわゆるワンルームマンション）……第7条 協定区域内の建築物の形態等は、次の各号の定める基準によらなければならない。（1）建築物の地上階数は、5以下とする。（2）建築物の最高の高さ（階段室、昇降機塔……その他これらに類する建築物の屋上部分を含む）は地盤面から18メートルを超えないものとする。……」（平成13年6月14日京都市認可（平成18年6月14日更新）「京都市中京区新町通百足屋町一部地区建築協定書」）

百足屋町の「守る会」の運動は、京都市都心部における住民主体のまちづくりの代表例になるだろう。2006（平成18）年現在の町勢は38世帯114人（男55人、女59人、15才未満10人前後）で、さすがに1965（昭和40）年の72世帯327人（男170人、女157人、15才未満49人）に比べると減少しているが、1980年代以降は変化していない。大きなマンションの建設により近年人口が急増した他の山鉾町と異なり、マンションがないため世帯数と人口が急増する現象は百足屋町には見られず、第二次大戦前後に移住してきた町家の住民が中心となって町並と町内社会を支えている。この町の運動に関わっているリーダーのなかには、知事選や市長選に立候補した者、京町家再生研究会に取り組んでいる者、ビジネスの領域で活発に京町家の普及活動を実践している者、等々の著名な人物もいる。彼らが余りにも頻繁にマスメディアに登場し大きなビジネスや政治の場に活動を広げすぎると、「守る会」の運動も一般の住民の町内社会から遊離し崩壊しかねないけれども、今のところ（財団法人）南観音山保存会が住民全体の連帯の要になって町内社会と「守る会」の運動を連結しているように思われる。

2005年7月に『百足屋町史』（全2巻）が刊行されたため、2001年から続けていた聞き取り調査や参与観察だけでは分かりにくい町の歴史、および町内社会と保存会の実態の細部についても、分厚い町史から読み取れるようになった。応仁の乱以前から〈ふだらく山〉の呼称で存在していた百足屋町の出し物は、その乱後、いつの頃からか〈南観音山〉になったと言い伝えられている。古い歴史を誇るこの町と山（実質的な形態は鉾）には楊柳観音や善財童子などにまつわる興味深い伝説と行事があるが、それはさておき、南観音山保存会が1966（昭和41）年に結成された当時は、既述のように現在の2～3倍ほどの世帯数と人口があったから、囃子方、曳き手、作事方などの山（＝鉾）の担い手は町内だけで何とかやりくりできたようであるが、

今は町外のパーソナル・ネットワークと人的サポートが欠かせなくなってきた。2001年11月に当時の町内会長と囃子方のリーダーに、南観音山の人手のやりくりのことも聞き取りしたので、忠実なテープ起こしの文章ではなく少し要約する形で引用してみたい。

【資料6】

「……南観音山という財団法人として祇園祭を運営している。町内会は明倫自治連合会に所属して防犯とかいろいろなことをしている。この町内で町内会と財団法人保存会の二つのことをしなくてはならないから、一人2役とか3役とかしなくてはならない。(町内会長は)持ち回りで順番で1年ごとの任期ですね。昔はここに問屋があってその大店ばかりが(会長を)やってはった。だんだんと時代が変わってそういう人たちが他所に住むようになったでしょ。……今は町内に4つの組がある。前は5つあったんやけど(1980年代末のバブル期の)マンション建設の地上げで1つ(第2組が)潰れたんですよ。4つの組で毎年順番で町会長を選んでいっているわけ。だから4年に一回回ってくるんですよ。……」(2001(平成13)年11月25日の百足屋町会所での聞き取り調査より)

【資料7】

「……この町は祇園祭やお囃子があってコミュニティづくりをはかっているわけ。毎月一回17日に町会所で笛や太鼓や鉦のお囃子の練習をする。ここに来る一人一人の子どもの顔を覚えている。そうしないとつながりができない。ここに来てくれることをわれわれお年寄りには楽しみにしているんやから。町内の子どもは5分の1くらいかな、ほとんどの子どもは町外から来る。……祇園祭の保存会の役員は2年に一回変わる。つないでいくために一応60才定年制を設けているけど、どうしても残ってほしい人には残ってもらって、それ以外は若い人を一人ずつ入れるとか。入れ替えていって次の世代につなぐために若手を育成しているわけやね。……」(2001年11月25日の百足屋町会所での聞き取り調査より)

資料6の語り手 Sa.T さんはインタビュー時の町会長であり、1985(昭和60)年に他県より百足屋町に引っ越してきたそうである。『百足屋町史』に、ほぼ世帯主全員が各自のエピソードを交えた寄せ書きのような短編を書いているので、それらを読み解いていくと現在の住民の居住歴と想いが、完全に正確な内容ではないにせよ見えてくる。Sa.T さんのような経歴を持つ居住者は他にも数名いるから、この町内は決して閉鎖的ではなく新しい住民を受け入れながら、町独自のエスノメソッド(人びとの日常生活の方法)ないしはハビトゥス(実践感覚と慣習行動=表象の生成の原理)を養成していく柔軟さを持ち合わせているようである。昔は表通りの大店が会長をして、路地裏に住む借家人たちは町の要職には就けなかったけれども、今は町内を4つの組に分け、輪番制で各組長が1年任期の町会長になるという。『町史』に、新婚夫婦が路地の家を購入し、ほどなく組長と理事になっていった事例が見られるように、年齢にこだわらずお互いに助けあう民主主義的風土がこの町の路地にあるのだろう。

資料7の語り手 M.K さんの父親は第二次大戦の頃から百足屋町の路地に住んでおり、M.K

さんは昭和40年代に家業を継いで刺繍職人になったそうである。町史などの資料によれば、現在の住民（両親と親族を含む）の多くは第二次大戦前後に様々な理由や事情で百足屋町に引越してきているから、M.Kさんはこの町の住民経歴を代表する人物かもしれない。近年、南観音山の懸装品の胴掛と水引を補修したり新調した刺繍職人であると同時に、囃子方のリーダーとしてこの町独自の祇園囃子を伝承し、次代の子供たちに教えている。文字通り南観音山とともに人生を歩み、刺繍と祇園囃子という技芸の分野で卓越した技能を体得して百足屋の山鉾町を支えてきた人である。

百足屋町の表通りには、マスメディアに登場するような目立つ建物や商店が立ち並んでいるが、この山鉾町を担い維持しているのは、新町通からは見えない路地に住んでいる人びとの心意気である。そのことを忘れてはならない。

4. 元学区自治連合会と天神山町のリーダーとして

百足屋町の東南に隣接した町が祇園祭の霰天神山（あられてんじんやま）のある天神山町である。30～40世帯、人口60～70人前後の、現在の山鉾町としては中規模の町になるが、小規模のマンションが3棟あり、それらのマンション住民を除く町家の住民は数世帯、15～20人程度しかない。1939（昭和14）年に出版された『明倫誌』（明倫小学校創立70周年記念誌）によると、当時の天神山町の世帯数25、人口210人（男145人、女65人）であり、いわゆる室町の染呉服・白生地商の商業地区の一つであった。2001（平成13）年度からの山鉾町の現地調査で最もお世話になった一人A.Iさんはその時の天神山町自治会長を務めており、また明倫自治連合会会長や山鉾連合会副理事長などの要職を兼ねていた。2章で取り上げた函谷鉾の理事長N.Oさんとほぼ同年代（80才過ぎ）で、かつては中学と高校の教員をされていた方らしく物静かで若々しいインテリ風の姿が印象的な人（世俗内禁欲的エトスの人）であったが、残念ながらN.Oさんより少し前（2005年）に亡くなられてしまった。

ゼミの学生がA.I氏とフォーマルな（構造化された）インタビューを実践しただけでなく、筆者も何度か京都芸術センター（元明倫小学校）の喫茶店などで自由な形式で会話をしたことがあるが、くり返し天神山町と霰天神山の名前の由来について興味深いことを語ってくれた。上記の昭和14年版『明倫誌』（同名の昭和45年版創立百周年記念誌もある）の関連箇所を引用しながら、語りの厳密なトランスクリプト（テープ起こし）ではなく、少し要約する形に編集して取り上げておこう。

【資料8】

「町名由来 古く霰屋町と呼び貞享（17世紀終わり）頃茜屋町となり寛保（18世紀前半）頃より天神山町と云う。……霰天神山 此の山は応仁乱前錦室町東入町より出したが、乱後明応九（1500）年以降当町より出す事となった。永正年中（16世紀前半）火災起り、時ならぬ霰降り来たって猛火は忽ち消散した。この奇瑞に驚いてよく見ると、長さ一寸二分の天神が霰と共に降って屋上に留ませ給うた。によって、霰天神とも又は火除天神と云い町名を霰屋町と名付

けた。』(『明倫誌』(明倫小学校創立70周年記念誌) 294~295頁)

【資料9】

「世界中どこの祭りを調べてもいえることだが、祭りの始まるきっかけとして伝承伝説というものがある。伝承伝説とは、事実でないことを事実のように説明し言い伝えられて残っている話のことである。天神山、霰天神山という名前にも伝承伝説による由来がある。……霰と天神様が一緒に降ってきたという伝承(資料8)だが、こういうことは実際にはない。嘘だと分かっているが、こういう伝承を伝えて、事実でないことを事実らしく説明する。そこで初めて天神山という名前になって長い間伝わっている。伝承が言い伝えられて、現代でもその話を印刷して、お守りなどを参拝者が買うときにその紙を添えて渡している。」(2001(平成13)年12月9日の天神山町会所での聞き取り調査より)

長らく中学と高校の教壇で教えてきたA.Iさんは、函谷鉾町のN.Oさんや百足屋町のM.Kさんのようにお囃子の技能を体得した祭り人間=演技者とは異なるタイプの世俗内禁欲的エートスと実践感覚を持つリーダーであり、かなり醒めた目で冷静に祇園祭を受けとめ山鉾町の役職を遂行している。資料8の文書による説明と資料9のインタビューにおける語りとを対応させてみると、山鉾がこの町から出すようになった応仁の乱の前後に大きな火災と急激な鎮火の歴史的出来事がある、人びとが出来事に「霰」と「天神」とを巧妙に組み合わせて付加していく過程で霰天神山と天神山町の伝承=伝説が出来上がり、今に至っているように考えられる。祭り伝承=伝説について淡々と語るA.Iさんも、祭りに入れ込むことはないが、長い歴史を持つ祇園祭を何とか絶やさずに継承し、次代に伝えようとする強い熱意とエネルギーを持ち合わせているように感じられた。

祭りの担い手と見物人の数、期間と費用などの面で祇園祭ほどの大きな規模の祭りになると、山や鉾を出す町だけでとても支えきれぬものでないから、サポートする社会制度やシステムのようなものが必要となる。すでに述べたように、明治以前は、都(ミヤコ)の内部に山鉾町を取り巻く形で寄町(よりちょう)と呼ばれる数多くの町が存在しており、祇園祭に必要な人・物・お金を提供していた。明治維新における社会制度全体の改革の過程で寄町制度も廃止され、その代わりに清々講社、山鉾連合会、祇園祭の各種の協賛組織、ボランティア・ネットワークなどが次々と作られてきたものの、肝心の山鉾町内部の地域社会自体に難しい問題が現れてきた。函谷鉾町と百足屋町のところでも指摘したように、一方における一戸建てや町家の住民の減少、他方における企業やマンション住民の増加によって祭りを支えるための地域の社会的基盤が脆弱になってしまった。A.Iさんは天神山町自治会長だけでなく明倫自治連合会会長と山鉾連合会副理事長を兼ねているため、山鉾町の現代的難問を重く受けとめている。

【資料10】

「今こそ寄合(近代以前の寄町のような)制度が必要である。天神山町内でも大きなお店があっても今は景気が悪い、倒産もしている……市や府や国がバックアップするような(近代以前よ

りも広域の) 寄合町を設けることが必要である。この町に住んでいるの(一戸建てや町家の住民)は4、5軒で人口にして14人程度でしかない。その家の子どもたちは嫁いだりしてこの町にはいない、お祭りのときはお手伝いでもしてもらえたらと呼びかけても仕事の関係でなかなか難しい。そういうことで寄合制が必要である。」(2001年12月9日の天神山町会所での聞き取り調査より)

【資料11】

「(天神山町の)一番の悩みは若い年齢層の役職者がいないこと、人手がないこと。人手がないから一人でいくつもの役をしていかないとけない。若い人がいないと(祭りも)絶えてしまう。……天神山町にはマンションが3軒(棟)あるが、その住民は祇園祭の運営にあまり協力的ではない。……こちらとしては縁があって町内に来てくれたのだから、他の人(一戸建てや町家の住民)と同じように窓を開けて受け入れるという感じで接しているが、反応がない。……(山鉾町の)どこでも歓迎しているが、マンション側に住んでいる人がわずらわしいと思うのではないか。年間通して手間がかかることはある。私の場合は(山鉾)連合会の役員もしているから、毎月理事会がある。多いときは2、3回ある。年間通してだから何十回ということになる。」(2001年12月9日の天神山町会所での聞き取り調査より)

資料10の語りでは、江戸時代の寄町制度を手がかりとしつつ、現代社会に合うような公的なサポート=協力体制を早急に作るべきことが力説されている。2003(平成15)年6月に山鉾連合会事務局(元明倫幼稚園)で「明倫自治連合会に関するフォーマルなインタビュー」を実施したときも、祇園祭の話題が出た箇所では寄町制度と協力体制に言及していた。霰天神山には、鉾に登場する囃子方がいないから、山の管理運営の諸役以外に曳き手の確保が重要な問題となる。資料11で語られているように、天神山町のマンションの住民は祇園祭や町の行事には参加しないようであり、現在では主として京都・祇園祭ボランティア21(曳き手ボランティアのネットワーク組織)と山鉾連合会を通じて、曳き手のボランティアを確保しているという。

マンション住民と祇園祭および自治会の関係いかんという問題は、山鉾町全体に共通する難問になっているが、A.Iさんの認識では、「こちらは呼びかけたり門戸開放しているのに余り参加してくれない」という状況になっている。マンションにもファミリータイプ、ワンルームタイプ等々のいろいろなタイプがあり、住んでいる住民のライフスタイルや定住意識などの面で多少の差異が現れてくるだろう。マンション住民の社会的属性や意識を適切に把握して、臨機応変に呼びかけていかないと期待したほどの協力は得られないかもしれない。マンション住民の問題ではA.Iさんは苦慮していたようであり、穏やかで禁欲的な語り口調の多いインタビューの中で、珍しくマンション住民に対しては明確に不満を述べていた。

5. マンション住民の多い鉾町と祇園囃子の伝承への熱い思い

ちょうど天神山町と函谷鉾町を結ぶ線上に、室町通に面した両側町の菊水鉾町がある。室町時代からあった町の恵比須社の掬水(菊水)と謡曲「菊慈童(枕慈童)」に因んで名づけられ

たと言い伝えられる菊水鉾は、応仁の乱の頃から江戸時代末まで祇園会（祇園祭）の巡行に参列していた。祇園会（祇園祭）の資料によると、応仁の乱の前は〈留水ほこ〉という呼称で巡行していたが、乱後は〈菊水山〉、そして〈菊水鉾〉に改称されたという。幕末・維新时期における禁門の変（1864（元治元）年）の戦火で焼失した後は第二次世界大戦後まで約八十年ほど祭りの表舞台に姿を見せることもなかった。菊水鉾は1952（昭和27）年に再興され、翌28年から再び巡行の列に加わるようになったとはいえ、この町自体は戦後における京都の都心の社会変動の荒波を経験してきた。すなわち、高度経済成長期における住民の流出、室町の繊維街の不況、町内社会の担い手の減少、近年のマンション建設ブームによる住民の急増といった激動に直面しながら、住民たちは伝統のある山鉾町を維持する努力を積み重ねてきた。そのような町の功労者の一人が、菊水鉾の祇園囃子の伝承に情熱を捧げている K.K さんである。

K.K さんは団塊世代の人であり、1953（昭和28）年に菊水鉾が復活すると同時に囃子方となり、その後は囃子方総代、山鉾連合会と菊水鉾保存会の理事として活躍してきた。近年は菊水鉾の囃子方「友の会」ともいべき「菊童会」の総代に就任し、2005（平成17）年7月に『菊水鉾囃子譜本』を刊行した。この譜本は44曲890ページにも及ぶ大変な労作であり、16年がかりで完成させたという。まさに、囃子方として歩んできた半世紀の人生の到達点（まだ最終ではないが）を示すライフワークである。K.K さんは譜本の刊行にとどまらず、地元のテレビや新聞などのマスメディア、あるいは公共機関や大学の祇園祭関係の講演会にも登場したりと大活躍しており、祇園祭の担い手として「有名人」になりつつある。祇園囃子と語り（講演）の卓越した技能を兼ね備えた K.K さんの個人情報には少なからず収集できるが、本稿では、2001年12月のインタビューを中心にして彼の心意気や熱い想いを探してみたい。

ゼミの学生たちに協力してもらおう形で祇園祭の本格的な参与観察と聞き取り調査を始めた2001年頃、菊水鉾町には大型マンションが建設されていた。『明倫誌』や京都市統計書などを参考にしてこの町の人口変動を追跡してみると、1935（昭和10）年302人（20世帯）、1965（同40）年77人、1985（同60）年25人、2000（平成12）年18人（5世帯）、2003（同15）年243人（117世帯）、2006（同18）年289人（149世帯）と約七十年間で急減と急増のサイクルを示している。2001年6月に町の北西部に総戸数59戸のマンション、2002年9月には金剛能楽堂の跡地に総戸数78戸のマンションが完成し、住民が15倍前後にまで急増した。マンション住民が町の人口の大半を占めるようになり、K.K さんのようないわゆる旧住民たちも、町と祇園祭の運営そのものを再検討せざるをえない状況に直面することになってきた。インタビューの語りのなかに、町の社会変動に対する考え方や対処方針を探っていこう。これまでと同様に、語りの厳密なテープ起こしではなく、関連する箇所を要約するやり方で取り出してみる。

【資料12】

「古い話をすると、囃子方というのは本来、町内の子どもや大人が鉦や太鼓だけをやってたんです。笛方はというと、昔は歌舞伎で笛を吹いている人や能楽師や下座音楽の笛師の一門の人がお客として吹きに来ていたんです。……今では4世帯になっているので、とても町の人だ

けでは囃子方をまかないきれません。……囃子方はボランティアなんだけれどアルバイトではできないから、囃子方をしたい人には財団で運営している囃子方の会に入ってもらいます。……（直接電話による町外の人からの入会希望に対して断ることもある）なぜならこの会に入る一番の権利を持っているのは、この町で生まれ育った子どもたちにあるからです。その次に権利を持つのは、町内の会社の人の子どもさんやその人の知り合いで入会したいという子どもさんです。」（2001（平成13）年12月9日の菊水鉾町会所での聞き取り調査より）

【資料13】

「（この町に生まれた子どもたちは祇園祭に関わっていかななくてはならないのか？）うん、棺桶に足を突っ込むまでね。（それをいやがる子どもはいないのか？）中には、いるかもしれないけれども、でも私の経験からしたら、これだけの日本の三大祭であり、世界の三大祭でもある祭りを動かすことができるという夢は、この町内に生まれ育った人間でないとできないことになっているから、それだけの使命感や優越感はやっぱりある程度持っているんじゃないかな。」（2001年12月9日の菊水鉾町会所での聞き取り調査より）

K.Kさんは、幼い頃から囃子方のメンバーとして、大人になってからはそのリーダーとして戦後の菊水鉾の再興と伝承に情熱を捧げてきただけに、祇園囃子と囃子方に関する語りには他の話題に比べかなり力が入り気持ちがこもっているように感じられた。資料12では、この町で生まれ育った子どもたち、ならびに町の関係者の子どもたちに対する熱い想いが語られている。また、資料13では、この町に生まれ育った子どもたちには、日本を代表する祇園祭を運営できるという夢があるし、その夢を実現する使命感や優越感があるはずであるという期待と確信が熱く語られている。ここでは紙幅の都合上、引用できないが、20代で囃子方総代に就任し現在の「菊童会」の総代を務めてきたと同時に、16年かけて44曲890ページの『菊水鉾囃子譜本』を完成させたK.Kさんの自信と誇りが、1時間半ほどの語りの随所にほとばしり出ている。得意の祇園囃子や囃子方のテーマ以外の町と祇園祭の運営全般についても、考え方と方針は一貫している。そこに、彼のエートス（倫理的生活態度）、あるいはハビトゥス（実践感覚と慣習行動＝表象生成の原理）が現れているというべきかもしれない。

【資料14】

「この向かいのマンションには59世帯入っているのだけれど、この人たちに（財）菊水鉾保存会と町内会と同時に入ってもらったとするね。そしたら、保存会には（決定権と運営権を持つ評議員が）25名いるのだけれども、59軒が上乘せされると、その人たちが祇園祭などの行事に反対したとしたら。……これまで伝統的に継承してきたことを総会で59軒が反対ですと言ったら、祭りができなくなる。むちゃくちゃになってしまう。だから（町内会の通常のメンバーと保存会の評議員とを）ずらしているのです。……（祇園祭と保存会に）参加したいという人があれば参加できます。しかし、評議員にはなれません。……だから、口が出せない（保存会の）会員。その代わりに、祭りには参加できるし、保存会の会議や行事にも参加できます。曳き手に

も囃子方にもなれます。」(2001年12月9日の菊水鉾町会所での聞き取り調査より)

【資料15】

「(マンションばかりの町ができてしまったとしら?)でも先ほど言ったように(財)保存会が運営しているから、昔その町に住んでいた人は関わっていいですよという約束を規則の中に入れてしまえば問題ないです。(もし昔その町に住んでいた人も一人もいなくなってしまうら?)まあ、伝承伝承でいっているから、めったにそんなことは無いよね。それにこれだけの祭りを運営しているという優越感を持っているから、なかなか退かないよね。退かないというより、退けないよね、自分自身のプライドとして。それがお祭りじゃかいなと僕は思うのだけれども。」(2001年12月9日の菊水鉾町会所での聞き取り調査より)

菊水鉾町は、21世紀になってマンション住民が急増したため従来の住民がかなり少数派になってしまったが、それに対してK.Kさんは資料14の語りに見られるような考え方と方針で臨もうとしている。この語りだけでは分かりにくいし誤解される恐れがあるのでインタビュー全体と他の資料などを参照すると、長年にわたり町内会と祇園祭の運営を実践してきた経験者が保存会の評議員になり、参加したいマンションの新住民の人びとには経験を積んでもらいながら徐々に運営の中心メンバー(評議員や理事など)として受け入れていく。何も分からない未経験者に、いきなり決定権を認めて重要な役割を任せると、千年の伝統を持つ祇園祭を秩序正しく実践できなくなり、最悪の場合には廃れてしまうかもしれない。資料14だけ読むと、かなり閉鎖的な態度のような印象を受けるけれども、2001(平成13)年の祇園祭を中心に収録されたNHKの約2時間のドキュメンタリー番組『21世紀最初の京都祇園祭』(2001年10月19日放送)におけるK.Kさんの語りなども併せて真意を推測すれば、日本を代表する祇園祭を大切にし次の時代に伝承していきたい熱意から、参加意欲のある者は苦しいことがあっても一つずつ体得しながら保存会の中心に入ってきてほしいと寛容の心で期待しているように考えられる。資料15では、祇園祭と山鉾町の担い手としてのプライドと責任の重さについて語られている。資料の14と15からは、意欲のある者なら誰でも歓迎するが、安易な気持ちで保存会と祇園祭に関わってもらいたくないという厳しい口調を感じ取れる。16年がかりで祇園囃子の譜本を完成させた、卓越した技能者K.Kさんには、確かにそう語るだけの資格があるといえよう。

おわりに

4つの山鉾町、およびそれらの町と祇園祭を支えてきた5人について取り上げてみたが、2001(平成13)年度からの聞き取り調査と参与観察では、その他にもたくさんの人びとにお話を聞いたり協力してもらった。残念ながら紙幅の都合や調査の進行状況などの事情のため、長時間のインタビューをしたにもかかわらず今回は取り上げることができなかった人びとについて少しだけ触れておきたい。

骨屋町(浄妙山)のT.Mさんは、浄妙山保存会理事長であり、親子二代にわたり長年町内会と保存会のために積極的に活動してきた。百足屋町の人びとと協力して町家研究再生運動に

取り組むと同時に、2003（平成15）年に骨屋町に建設された大きなマンションの住民との連携を模索している。それ以前からマンション住民の問題に直面し連携を図ろうとしてきた先達が、鯉山町（鯉山）の町内会長（保存会理事長）を務めてきたY.Aさんである。2000（平成12）年4月の町内会規約で正式な会員をⅠ類（町内の大型マンション在住者以外の会員）とⅡ類（大型マンション在住者）に分類し、役員、町内会の行事、お祝いとお見舞い、会議、会費等の項目について分類に沿った規則を定めた。町家や企業主などの従来の住民と新しいマンション住民の共存に基づき、町と祭りを運営していこうとする斬新な試みの一つである。橋弁慶町（橋弁慶山）のM.Hさんは、烏丸通に面した企業・商業ビルの多い町で自身が大きなビルを所有しながら、橋弁慶山という文化財の維持と祭りの運営のために努力しているリーダーである。住民の少ない町（10世帯、20人前後）であり、とても町の住民だけでは祇園祭を運営できないので、町内の企業と町外のネットワークを臨機応変に活用しながら祭りの人材を確保している。船鉾町（船鉾）のY.Sさんは、函谷鉾町のN.Oさんと同様に保存会と自治会の長として長年にわたり大活躍し、船鉾のおしゃれなパンフレットなどを発行し鉾の宣伝活動にも取り組んでいる。住民がいない函谷鉾町とは異なり、近年マンションの建設に伴い人口が急増している町で住民全員の協力体制を図ろうとしているが、伝統的な慣習を尊重する立場から女性の祇園祭への参加には一定の制約を設けている。

本稿では、山鉾町でリーダーとして活動している保存会理事長や理事、あるいは自治会長を選んで彼らの語りを中心に心意気（エートス、ハビトゥス、エスノメソッド、民間伝承）を描き出してみたが、もちろん、祇園祭のハイライトである山鉾巡行を支える人びとは数え切れないくらい多くいる。リーダーたちの心意気と実践活動は、多数の町内の住民、町外の関係者、ボランティア、アルバイトたちの実践に支えられることによって「栄えある、輝かしい姿」となる。そのことを忘れてはならない。いずれ機会があれば、本稿で取り上げられなかった人びとの心意気と実践についても書いてみたい。最後に、参与観察と聞き取り調査にご協力いただいた現地の多くの人びと、ならびに、現地調査とテープ起こしの作業に積極的に参加してくれたゼミの学生たちに改めて感謝します。

[本稿は神戸女学院大学研究所、2006年度研究助成金による研究成果である]

(原稿受理 2006年12月1日)